

【研究ノート】

ディクスムイデの長い影

——ベルギー・フランデレン地域における戦死者追悼の歴史的展開

千葉大学大学院人文公共学府人文公共学専攻博士後期課程

柴田 拓海

1. はじめに

ベルギーの2大都市ブリュッセルとアントウェルペンから西に100キロメートルほどの場所に西フランデレン州のディクスムイデという町がある。日本のベルギー観光ガイドには載っていない閑静な田舎町であるが、この町を訪れた人はそこに立つ巨大な塔に圧倒されるであろう（写真1）。この塔は町の近くを流れる川の名前からエイザー塔と呼ばれ、第1次世界大戦で命を落としたフラマン人兵士を慰霊し、平和を訴える博物館兼モニュメントである。この地では第1次世界大戦の終戦から100年以上にわたって慰霊のため「エイザー巡礼」という集会が毎年夏に開かれている。

ディクスムイデは第1次世界大戦で侵攻してきたドイツに対するベルギー最後の抵抗拠点の一つであった。ベルギー軍は塹壕を掘ってドイツ軍とにらみ合い、時には川を氾濫させて進軍を遅らせるなど文字通り泥沼の防衛戦を成功させ、侵略を撃退した。しかし、そこには多くの犠牲があった。当時のベルギーの兵士の多くがオランダ語を用いるフラマン人で構成されていたが、軍の上層部ではフランス語のみが用いられており、伝令や命令はフランス語で行われていた。改善を訴える兵士たちの活動も虚しく、オランダ語しか話せない多くの兵士が指示を理解できないまま戦場で死んだという。エイザー塔やエイザー巡礼はそうした兵士のためのものであり、平和主義だけでなくベルギー政府がフラマン人を冷遇した記憶を思い起こす役割も担っていた。

【写真1】ディクスマイデに立つエイザー塔（写真右）



出典：筆者撮影

そうした性格上、塔や巡礼はオランダ語話者の地位向上、フランドレン地域の独立や自治拡大を訴える運動（フランドレン運動）と密接につながっており、第1次世界大戦後は単一国家としてのベルギーを脅かすものとして、また、第2次世界大戦では多くのフラマン民族主義者がナチスドイツの占領政策に協力（コラボレーション）した関係から、祖国を裏切って全体主義に加担にした人々の象徴として、しばしば激しい抗議にもあった。時には塔が破壊され（現在建っている塔は2代目）、巡礼で暴動が発生したこともあった。このように、ディクスマイデは複雑に重なり合ったベルギー史の影が横たわる言語紛争の最前線のひとつだったのである。

そして、ベルギーの言語紛争はベルギーの政治に大きな影響を与えた。第2次世界大戦後、フラマン民族主義に基づくフランドレンの地域主義政党が国政において強い影響力を発揮し、1960年代末から始まる主要政党の言語別分裂、1970年代からの連邦化という結果をもたらした。2024年11月時点のベルギー下院における第1党と第2党はいずれもフラマン民族主義者の政党であり、現代ベルギー政治の下地を理解するにはフランドレンにおける民族主義の歴史、民

族内で共有される記憶を理解することが不可欠なのである。

しかしながら、エイザー塔や巡礼に関する研究は意外に少なく、ベルギー国外で戦争をめぐるフラマン人の歴史記憶が語られる場面はごくわずかである。国内の文献では石部尚登（2011）と佐藤竺（2016）が第1次世界大戦時のベルギー軍の言語状況とその影響について簡単に言及したものにとどまる。そこで本稿ではこれらの起源と歴史的展開について言語対立を軸とするベルギー政治史と照らし合わせながら議論を行っていく。これにより「ベルギー史」に埋没した「影」としてのフラマン民族主義運動の根底にある民族的記憶を明らかにし、ベルギーの連邦化や地域主義政党の台頭の原動力についてより深い理解を得ることが期待できる。

なお、本稿では特に断りがない限り、フランドレン運動全般についてはDEVB（2023）の『Encyclopedie van de Vlaamse beweging』、第2次世界大戦の事柄についてはCegeSoma（2017）の『Belgium WWII』という2つの専門家監修のオンラインデータベースを参考文献とし、エイザー塔と巡礼については主にReyntjens（2014）とVandeweyer et.al（2021）による文献を元に議論を進めていく。

2. 塔と巡礼の起源としての第1次世界大戦

第1次世界大戦とフラマン民族主義

1914年のサラエボ事件に端を発する第1次世界大戦は、たちまち欧州の列強を巻き込む大戦争に発展した。それは当時中立国だったベルギーも例外ではなく、ベルギーはドイツの軍事通行権を拒否した結果、ドイツから宣戦された。また、ベルギーが侵攻されたことにより、イギリスは1839年のロンドン条約でベルギーの中立を保障する義務があるとしてドイツに宣戦した。

ベルギーになだれ込んだドイツ軍は計画より遅れながらも都市を次々陥落させ、各地で略奪、虐殺、強姦を働いた。一方、ベルギー軍は再編成してエイザー川とそこから伸びるエイザー・イーペル運河に沿って防衛線を構築した。10月18日にエイザー川での戦闘が始まり、ドイツ軍はいくつかの地点で突破に成功

した。しかし、27日にベルギー軍は川を氾濫させ、敵軍を撤退させる。翌年の1915年には第2次イーペルの戦いでドイツ軍が初めて毒ガスを使用するなど激しい戦闘が繰り返されるが、戦線はほとんど動かず、戦いの中心はヴェルダンやソンムといったフランス方面に移っていった。

膠着状態が続く中、フラマン人兵士たちは次第にフランス語優位の軍の上層部に不満を持つようになり、「フロント運動」など独自の運動を組織するようになった。中にはフラマン人兵士の待遇改善を求めた公開書簡を国王に送った者もいたが、政府や国王はフランス語話者の反発を恐れてこれを受け入れることはなく、むしろ、オランダ語話者の運動を取り締まるような対応をとった。このことから、ベルギー国家の枠内でオランダ語使用の拡大を訴えていた穏健派も次第にベルギーから分離独立すべきという主張に共感を持つようになった。

ベルギーの領土の大半を占領したドイツ軍はこうしたベルギーに対するフラマン人の不満をベルギーの弱体化に利用しようと考え、フランデレン運動の要求に耳を傾けた。特に戦前からの悲願であったヘント大学の教育言語をオランダ語にする計画は多くのフラマン民族主義者の心を惹きつけた。加えて、フランデレンとワロニーを分割した統治が行われ、前者にはフラマン民族主義者によるフランデレン評議会という議会が設置された。しかし、一部ではドイツ主導で要求を実現させるのは危険だという慎重論もあり、運動内部でも対立が存在した。ドイツとの協力に積極的な人々を「アクティビスト」、消極的な人々を「パッシビスト」と呼ぶ。

また、ドイツ側も1917年以降、ベルギーから手を引くことを条件に和平を結ぶべきだという和平派とこのまま戦争を継続させて完全な勝利を目指したい継戦派の対立を抱え、フランデレンの占領政策は両者の間で板挟みになった。最終的にドイツの敗戦によりベルギーの独立が回復するとドイツとアクティビストの協力による占領政策は終了した。戦後、アクティビストたちは1919年に「フロント党」を結成した。同党はこの年の下院選挙で5議席を獲得し、収監されたアクティビストに対する恩赦の実施を求めるなど一定の存在感を示した。

初期のフランデレン運動のイメージ

ベルギーの歴史学者、マルニクス・バイエン (Beyen, 2012) によれば、戦前のフランデレン運動ではフランデレンの歴史上の人物や集団が英雄として様々な政治勢力のシンボルとなり、それらは第1次世界大戦を通じてカトリックとともにフランデレン運動の中で統合されたという。エイザー塔や巡礼はそのプロセスの中で生まれたものである。ここでは、塔や巡礼の背景を理解するため、バイエンの議論を元に第一次大戦前のフランデレン運動におけるシンボルの性質と、第1次大戦中に起きたシンボルの統合について確認する。

初期のフランデレン運動のイメージを形成したのはフランデレンのオランダ語文学に貢献したヘンドリック・コンシャンスである。彼が1838年に発表した代表作『フランデレンの獅子』は1302年に起きた金拍車の戦いを題材とした歴史小説で、フランドル伯国を支配しようとしたフランス王国から独立を守った「クラウワールト」と呼ばれる騎士たちの戦いを描いている。この本は明らかに民族主義的な動機から書かれたものであり、コンシャンスは強大な敵を前に勇敢に戦うクラウワールトを描くことで、フラマン人の読者に今自分たちが置かれている不利な立場を自覚させ、それに抗う勇気を与えたのである。この物語によって金拍車の戦いはフラマン人のアイデンティティの一部となり、後にこの小説を元にした歌が作られ、戦いで用いられたフランドル伯の獅子の紋章がフランデレンを象徴する旗になった。

また、コンシャンスは他にも多くのフランデレンの歴史小説を執筆し、様々な歴史上の集団を英雄として描いた。『農民戦争』では1798年にフランス占領軍に抵抗した「山賊」と呼ばれる人々を、『フランデレンの奴ら』では封建領主から自治権を守ろうとした「ケレル」という自由農民集団を題材にした。コンシャンスが取り上げた「クラウワールト」、「山賊」、「ケレル」は後にフランデレンの政治勢力を象徴する英雄として扱われた。

特に、農村部を地盤とするカトリック勢力は田舎の英雄の山賊やケレルを自身と同一視した。これに対し、クラウワールトは都市を守った英雄であり、都市部を地盤とする自由主義者たちがシンボルとして用いた。しかし、都市部の

カトリック勢力もクラウワールトを掲げるようになり、自由主義者はフランデレン騎士団や次に紹介する「大乞食」ウイレンシュピーゲルといった別のシンボルも使用するようになる。

物語の登場人物が政治的なシンボルになる現象はフランデレン文学でない作品からも起きている。フランス語圏の作家、シャルル・ド・コステルはドイツの民間伝承を現代風にアレンジした『フランダースとその他の地域におけるウイレンシュピーゲルとラム・グートザックの伝説と英雄的で楽しく輝かしい冒険』を発表した。ド・コステルはこの物語の中で主人公のウイレンシュピーゲルを「乞食」と呼ばれるスペインやカトリック教会の支配に抵抗するフランデレンの戦士として描いた。ウイレンシュピーゲルは「大乞食」と呼ばれ、物語の反教権的なメッセージから自由主義者や社会主義者にとっての英雄になっただけでなく、翻案を通じてカトリックのアイデンティティにもなった。

こうして理想化された文学上の英雄たちは活躍した時代も場所も崇拜される集団も異なるものであったが、第1次世界大戦の中でこれらのイメージが「フラマン的なもの」というひとつの普遍的な概念の下に統合されていく。

バイエンはこの統合がフラマン民族主義者で第1次世界大戦中に戦死したファン・レムドンク兄弟の弟、フランス・ファン・レムドンクが生前記した手紙によく現れていると指摘する。彼は休暇を利用してブルッヘを訪れ、そこで金拍車の戦いの英雄に思いを馳せたことを故郷への手紙に記している。その中でルーベンスやファン・ダイクといった画家にも言及すると同時に、ルネ・デ・クレークという詩人も画家たちと同列に扱われている。デ・クレークはこの手紙が書かれた1915年当時も現役の詩人で、フラマン民族主義者としてフランデレンの農村を描いた作品を数多く発表していた人物であり、大都市で活躍していたルーベンスやファン・ダイクと並べるには異質な存在である。同様の並列は都市においてもなされており、ブルージュ、アントウェルペンといった大都市とともに、イーペル、ルーヴァン、テルモンドといった比較的規模の小さい都市も同格に並置されてひとまとまりに語られている。

この統合が主にカトリック勢力の中で起きた点も重要である。独立からフラ

ンス語のみによる単一言語政策を推進してきた自由党に対し、フランデレンの農村部に支持基盤を持つカトリック党は言語法制定によってオランダ語の使用機会拡大に貢献してきており、フラマン民族主義とは近い立場にあった。また、戦中の民族主義運動で主導的な役割をした人物にはカトリック系の私立学校で教育を受けた者が多く、エイザー塔や巡礼にもカトリックの要素が見られる。

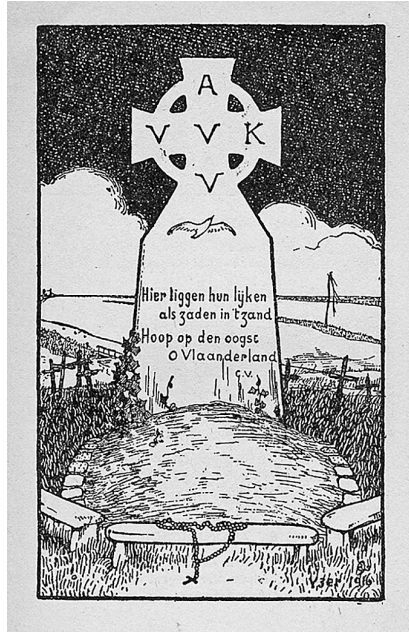
エイザー塔とエイザー巡礼の起源

戦時中に組織されたフラマン人兵士の運動のひとつに英雄追悼委員会がある。当時、ベルギー軍の兵士が戦死すると軍から木の墓標が提供されたのだが、その墓石にはフランス語で「祖国のための死」を意味する「Mort pour la Patrie」と刻まれており、これがフラマン人兵士に対する侮辱だと受け止められていた。そこで、この墓標をフラマン人にふさわしい墓石に取り替えるため組織されたのが英雄追悼委員会であった。墓石のデザインはカトリック風のプロパガンダを多く残した画家で、自身も従軍していたジョー・イングリッシュが考案したもので、ケルト十字に「Alles voor Vlaanderen, Vlaanderen voor Kristus (すべてはフランデレンのために、フランデレンはキリストのために)」の頭文字を取った「AVV-VVK」の文字が刻まれていた(図1)。「AVV-VVK」のデザインは後に建設されるエイザー塔にも採用されている。

ただ、この活動に否定的な立場もあり、フラマン人兵士の墓は何度か毀損されている。最初の毀損は1918年2月9日未明で、何者かによって複数の墓のAVV-VVKの部分にセメントが塗られた。さらに、終戦後の1923年にはベルギー政府がすべての戦没者の墓のデザインを統一するという目的で既存の墓を撤去または取り壊しすることを決定した。取り壊された墓石の中には道路敷設のために再利用されていたこともわかり、フランデレンで大きな憤りを呼び起こした。

第1次世界大戦が終結すると、1920年9月にフランデレン退役軍人協会が主催する追悼行事が、1918年に病で亡くなったジョー・イングリッシュの墓があるステーンケルケで行われ、数百人が参加した。これが第1回のエイザー巡

【図1】 ジョー・イングリッシュによるフラマン人兵士の墓のデザイン



出典：パブリックドメイン

礼とされている。巡礼はここから毎年行われるようになったが、開催地は毎回異なっていた。第2回はフランデレン運動に従事しながら戦死したファン・レムドンク兄弟の墓で、第3回はフラマン民族主義運動のビラを持っていたことを理由に逮捕され、ハンガーストライキを行ったレナート・デ・ルダーの墓で行われている。

なお、この第1回の告知の中で活動家のフランス・デールスはイングリッシュの死は軍の上官が彼の病の兆候を無視した結果であり、彼もまたベルギー軍の犠牲者のひとりであると主張した。しかし、デールス自身も生前のイングリッシュの上司であり、イングリッシュに病の兆候があったとするならば、なぜデールスは行動しなかったのかという疑問が残り、意図的に誇張された可能性が残っている。

同様の事実の歪曲はファン・レムドンク兄弟についての言説でも見られる。1917年3月25日未明、弟のフランス・ファン・レムドンクはワロン人兵士のアメ・フィエベスを抱きかかえて死亡したが、その事実は無視され、同じ日に近くの別の場所で亡くなった兄エドワードとともに抱き合って亡くなったという物語に置き換わっている。さらに、この物語は兄弟愛を強調するあまり、兄弟がドイツ軍の銃撃によって落命したという事実も軽視されていた。このように、一連の活動はフラマン人戦没者を追悼するとともに、事実を誇張・歪曲させながら、侵略してきたドイツではなくベルギーを非難する性格が最初から備わっていたのである。

戦没者追悼という行為にそうした性格がある以上、フラマン人がベルギー軍の犠牲者であると単純化できるものではない。そもそも、ベルギー軍でのオランダ語の使用を認める法律は1913年に成立しており、ベルギー政府に言語的平等を実現する意思がなかったわけではない。ただ、法律は4年後に施行するはずであったが、それを待たずに第1次世界大戦が勃発してしまったため、実現が見送られてしまったのである。

また、第1次大戦中、ベルギーに侵攻したドイツ軍は各地で市民に対する略奪、暴行、強姦を行っており、その中で占領軍に協力し、占領軍の野蛮な行為を非難することを避けようとするフラマン民族主義者に対して反感を持たれるのも当然であった。そのため、フラマン人兵士の墓やエイザー巡礼はしばしば反対派による抗議にも直面することになる。

エイザー塔の建設

最初期のエイザー巡礼は各地のフラマン人兵士の墓で行われてきたが、ベルギー政府が既存のフラマン人兵士の墓を撤去または取り壊すと決定した1923年以降、ベルギー軍の兵士の墓は国立墓地へと集約されるようになり、それまでの墓に代わる新たな祈りの場が必要とされた。そこでエイザー巡礼委員会はディクスミイデのエイザー川のほとりの土地を購入し、そこを毎年巡礼の開催地とした。さらにこの土地にカトリックの特徴を備えたフランデレン独自の

記念碑——エイザー塔を建設することを決定した。塔の意義について、エイザー巡礼委員会のフランス・ダールズ委員長はフラマン人兵士の墓が毀損されてきたことを指摘しながら、「人々が永遠に打ち砕きたかった貧弱な墓石が、不滅の十字架に取って代わられる」と述べている。

塔はコンベを経て建築家のファン・アーフェルベーク兄弟による設計が採用され、1928年に建設が始まり、ベルギー独立100周年となる1930年に完成した。塔は高さ50メートルのモダニズム様式の建築物で、塔全体が巨大な十字架を模している。

塔には4か国語で「No More War」というメッセージが掲げられたが、塔はもっぱらフラマン人の戦死者を追悼するという性格が強い。1931年から1934年の全4回の巡礼にわたって、塔の周囲に4つの戦死者の彫像が建てられたが、そのすべてが巡礼委員会の定める「エイザーの英雄」というフラマン人兵士であった。また、1932年と1937年には塔の地下に兵士の遺体が収められたが、これもほとんどが「エイザーの英雄」のフラマン人であった。彼らはフランデレン運動に従事していたと同時に、ベルギー軍の兵士であったにもかかわらず、そうした視点は追悼の場には現れない。加えて、彼らは出身も戦死した場所も異なっているのだが、エイザー塔で追悼されることを通じて個々の文脈から離れ、彼らの死は「ベルギー人」や個々人としてではなく、「フラマン人」として記念された。

また、「エイザーの英雄」は人々のために自らを犠牲にした聖人として描かれており、カトリック的な性格も強い。ただし、彼らの伝説はジョー・イングリッシュやファン・レムドンク兄弟の逸話のように、誇張の可能性があるものや事実かどうか疑わしいものも存在する。

塔の上部にはフラマン人兵士の墓に書かれた「AVV-VVK」の文字が刻まれていて、その中には「ネレ」と名付けられた鐘が吊るされていた。ネレはウイレンシュピーゲルの物語に登場する主人公の恋人で、ウイレンシュピーゲルがスペインとの闘争のために街に行っている間、地元の田舎町に留まった人物である。バイエンの説明によれば、彼女はカトリックのフラマン民族主義者にとっ

てフランデレンの田舎を象徴する人物であった。

一方、バイエンは鐘が吊るされた塔が中世フランデレンの都市に見られた鐘楼も想起させていて、ディクスミデという田舎町に都市のイメージを移植させていると指摘している。このように、エイザー塔はフランデレンの都市と農村、過去と今を「フランデレン」と「カトリック」の名のもとにつなぎとめるモニュメントであった。

3. コラボレーションとその遺

ボルムス選挙

エイザー塔の建設が始まる1928年、フロント党は逮捕されたアクティビスト全員に対する恩赦を求めたが、政府は刑期が10年以下の者だけを恩赦の対象とした。フロント党はこの対応は不十分だとして抗議し、同年のアントウェルペン行政区議会の補欠選挙にアクティビストで終身刑に服していたアウグスト・ボルムスを擁立した。

ボルムスは先の大戦中、ベルギー人をドイツ側で強制労働させ、アクティビストによる軍隊の育成にも関わった人物であった。彼は死刑を宣告された後、終身刑に減刑され、1919年末には一切の政治活動をしないという条件で釈放も認められたが、それを拒否し、他のアクティビストに対する恩赦を求めて獄中から政治活動を行った。こうしてボルムスは自分の自由と引き換えに他人のために精力的に活動することで、自分がフラマン民族主義の殉教者であるとアピールすることができた。

ボルムス擁立は1924年にも試みられていた。しかし、ボルムスが公民権を剥奪され、党内対立にも巻き込まれたことで挫折していた。しかし、1928年の補欠選挙では、フラマン民族主義者の間で最も「フランス的」だとされていた自由党のパウル・バールデが元職の後任候補として出馬したことで、言語問題が争点となり、ボルムスは再びフロント党候補として推されることになった。

自由党以外の主要政党のカトリック党と社会党は候補者を出さず、党員に白票を投じるよう呼びかけていた。しかし、アントウェルペンの社会党系の日刊

紙『フォルクスガゼット』は自由党に批判的だったに加え、フラマン民族主義に対して親和的な論調だったということもあり、ボルムスを暗に支持していた。結果として、ボルムスが83,058票を獲得し、44,410票獲得したバールデに2倍近いスコアで勝利した。しかし、白票や無効票も58,052票あり、ボルムスが必ずしも圧倒的多数の支持を集めたというわけではなかった。また、公民権を剥奪されていたボルムスに代わって議員になるはずだったフロント党の補欠候補も公民権を剥奪されたことで、結局バールデが当選した。

しかしながら、ボルムスの勝利によってフロント党に勢いがついたことは確かで、翌年の下院選挙では前回の5議席を大きく上回る11議席を獲得した。時のアンリ・ジャスパール政権もフランデレン運動の拡大を無視することはできず、政府が言語問題の解決に取り組むと約束した。これにより、ヘント大学のオランダ語化が正式に実現しただけでなく、地域別一言語主義に基づいて言語と領域を原則一致させることが確認された。

フラームス国民連盟の登場とエイザー巡礼への影響

言語問題への取り組みが進む一方で、フロント党は徐々に衰退していった。そもそも、フロント党は自治・反戦・神の平和を原則としていた。ここで言う神の平和とは、フランデレンの自治を達成するまでの間、あらゆる政治的論争を棚に上げて多元主義を維持することを意味する。しかしながら、保守派が根強い地方支部では神の平和が支持を遠ざけてしまうという声があり、地方支部が独自にカトリックや急進右派の性格を強めていった。そのため、フロント党はリベラルで穏健なアントウェルペン支部と保守的で急進派のその他の地方支部という2つの潮流ができてしまい、党の結束を弱めていた。

こうした事実上の分裂状態に加え、1931年にオランダとフランデレンを合併すべきという大オランダ主義を掲げるファシズムに近い「ディーチェ国民連帯主義者協会」(通称、フェルディナソ)が設立されたこともあり、フラマン民族主義者の間で反ベルギーを掲げる急進派への支持が高まった。1932年の国政選挙でフロント党が議席を減らしたのを受け、同党の候補だったスタッフ・デ・ク

レークは新たにフラマン民族主義運動を統一させる必要性を感じ、新党「フラームス国民連盟 (VNV)」を結成した。

VNV は大オランダ主義、反共主義、反自由主義を掲げた権威主義的な政党であったが、穏健なフラマン民族主義者も党に取り込みたいという思惑から急進的な主張を抑えることもあった。例えば、1936 年の国政選挙では VNV は「フラームス国民ブロック (VNB)」という比例代表名簿を作成し、穏健なマニフェストを掲げることで、VNV に所属していない民族主義者もこの名簿から立候補できるようにした。これにより、VNB は下院で 16 議席を獲得する活躍を果たし、フラマン民族主義の担い手の座をフロント党から奪取することに成功した。

選挙で勝利したデ・クレークは政権獲得に向けて、同選挙で勢力を伸ばしたワロニーの権威主義政党の「レックス党」と協力関係を結び、ベルギーがドイツに占領された場合の支援と協力について交渉をナチスと秘密裏に行っていた。その一方で、VNV はベルギーの親フランス勢力がフランスの国益のためにベルギーを戦争に巻き込もうとしていると煽り立て、あたかも戦争に反対する政党かのように装った。

こうしたフランデレン運動のファシズムへの接近はエイザー巡礼の場においても例外ではなかった。1931 年の第 12 回エイザー巡礼にてウィーンから来た 8 名が国民社会主義組織の制服を着用していることを理由に入場が拒否され、VOS がレンキン首相にこのような人物に入国許可を与えたことに抗議している。また、1934 年の第 14 回エイザー巡礼では物理学者のアルバート・アインシュタインが巡礼委員会に招待されたが、VNV の活動家で反ユダヤ主義者のヴァード・ヘルマンスがこれを阻止した。これ以降、巡礼委員会内の VNV の影響力は強まり、巡礼では鉤十字の花輪が贈られたり、ヒトラーを擁護する演説が行われたりと親ナチス的な性格を帯びるようになった。

第 2 次世界大戦中のフランデレン運動

戦間期のベルギーでは国王レオポルド 3 世のもとでフランスとの軍事協定破棄などの中立政策がとられた。ドイツのポーランド侵攻後に組織された第 3 次

ピエルロ内閣も中立宣言を発出することで戦争を回避しようとした。西部戦線ではしばらく「まやかし戦争」と呼ばれる戦闘が発生しない期間が続いたが、1940年5月10日にドイツはベルギーに侵攻し、18日間の戦闘の後、降伏した。

ベルギーがドイツに侵攻された直後、ピエルロ内閣の閣僚たちは安全保障上のリスクがあるドイツ人、共産主義者、レックス党の活動家、フラマン民族主義の活動家をフランスにある強制収容所に追放することを決定し、2000～3000人ほどの人々が列車で移送された。このプロセスは正式な手続きを踏んでおらず、有罪判決を受けたわけでもない人々が逮捕され、国外に追放され、虐待を受けた。彼らは食事や衛生設備のない家畜用貨車に乗せられ、移送中に命を落とした者もいた。

1940年6月にフランスが休戦を申し入れた後、強制収容所の収容者は7月に解放された。元収容者たちは帰国後、自分たちの経験について記した本を多数出版した。一部ではドイツのプロパガンダ部門が反ベルギー感情を煽るため、こうした手記の出版を助成した例もある。これらの著書を通じてフラマン民族主義者たちはベルギー政府が自分たちの敵だと認識するようになり、ドイツ占領軍への協力へとかじを切るきっかけとなった。

ベルギーがドイツに占領された後、ヒトラーに全幅の信頼を置く VNV 代表のデ・クレークはドイツの下で国民社会主義フランデレンの建国を目標とし、これに反対する者はすべて敵とみなすと宣言した。占領軍は VNV のメンバーを州知事や市長に任命して統治を行わせた。こうして VNV は占領地で権力を拡大し、ドイツの指導の下、市民に強制労働や密告を行わせた。しかしながら、ヒトラーはベルギーをドイツに併合させることを好んでおり、親衛隊の支援で大ドイツ主義組織「ドイツ・フランデレン労働者共同体（デ・フラフ）」が設立されると、VNV はこれと対立した。

VNV はデ・フラフにドイツの関心が移ることを危惧し、積極的に軍事協力をする事でドイツへの忠誠心を示そうとした。1941年2月にデ・クレークは連合国に対する沿岸防衛隊の組織を提案し、同年4月には武装親衛隊への徴兵を指示した。こうして組織されたフラームス軍団は武装親衛隊の一部として実際

に独ソ戦の前線に派遣され、一定の宣伝効果をもたらした。しかし、ドイツから直接支援されているデ・フラフに対して優位に立つことはできなかった。

1942年9月20日、デ・クレークは心臓発作により死去し、新たにヘンドリック・エリアスがVNVのリーダーとなった。エリアスはデ・フラフや親衛隊との対決姿勢を明確化したものの、目立った成果を出すことはできなかった。VNV内部からは、フラームス軍団を派遣したり、レジスタンスの標的にされたりして血を流すメンバーもいる中、ドイツと対立して目標を実現できないエリアスのリーダーシップに対して疑問の声が投げられるようになった。その後もエリアスは親衛隊と大オランダ主義の実現に向けて交渉を続けたが、1944年7月12日、ヒトラーがフランドレンのドイツ併合を決定したことでVNVの運動は挫折した。

そして、ベルギーは連合国の反攻によりベルギーが「解放」されると、VNVやデ・フラフの幹部や党員はドイツに逃れた。残された対独協力者はレジスタンスや市民から現地当局の権力空白に乗じた暴力や侮辱を受け、当局の権力が回復するとコラボレーションの罪で処罰を受けることになる。

戦中の巡礼と塔の破壊

1940年、ナチスドイツに占領されて以来初の巡礼が行われたが、巡礼委員長のフランス・ダールスはVNVに加入したこともあり、巡礼はよりいっそうナチスに迎合的なものと化した。式典ではオランダ民族とゲルマン民族の近親関係が強調されたほか、ダールス委員長はドイツの支援の下、大オランダを建国する可能性について示唆した。1941年の巡礼に向けた議論では反戦のスローガンを巡礼の場から排除すべきではないかという議論がなされた。結局、穏健派であるVOSの反対もあり、この年の巡礼では反戦スローガンは残されたものの、式典ではバルバロッサ作戦を行ったドイツへの連帯が表明され、この戦いがフランドレンのための戦いであるとも解された。

1943年以降、枢軸国の戦況悪化に伴って、巡礼委員会とドイツとの距離は離れていった。ダールス委員長はVNVを離党し、式典では大オランダ主義は主

張されず、「ゲルマン民族との団結」ではなく「ヨーロッパの団結」が謳われるようになった。ドイツの敗北が決定的となった1944年の巡礼は非公開で行われ、参加者はわずか30人ほどであった。これ以降、エイザー巡礼は1948年まで開催されることはなく、1940年から44年までの5回の巡礼は後に非公式なものとなされ、公式の開催回数にはカウントされなかった。

エイザー巡礼がドイツに協力的だったという事実によって、フランデレン運動の反対者から大きな反発を招いた。1945年6月15日未明、何者かによってエイザー塔が爆破され、塔に大きな穴が空いた。1946年3月15日に塔は再び爆破され、全壊してしまう。2度目の爆発の犯人の捜査には難航を極め、犯人が逮捕されたのは1948年になってからであった。そのうえ、ヘント司法長官のヘルマン・ベカルトの介入もあり、犯人とされる12人は起訴されなかった。ベカルトは当時の法務大臣アドルフ・ファン・フラッペーケに代わって介入を行ったと主張している。ファン・フラッペーケは自由党の政治家で、法務大臣の職務の傍ら、容疑者たちの弁護士も務めていた。

この12人の素性は明らかにされなかったが、地元のジャーナリストによる調査でうち4人はベルギー軍の爆発物処理部隊の人物であると明かされた。彼らはレジスタンスとしても活動しており、部隊が管理していた爆発物の倉庫から爆弾を持ち出し、塔を破壊したと見られる。しかし、誰が実行役に指示を出したのかは現在もわかっていない。

この事件によって、フランデレンの怒りはいっそう高まった。特にカトリック勢力は、エイザー塔がカトリックのシンボルかつ兵士たちの墓も兼ねていることから、カトリックに対する冒涜だと非難し、カトリック党は塔再建のための費用を要求した。

第2次大戦後のフランデレン運動

第2次世界大戦が終結するとVNVもデ・フラフもコラボレーションに対する処罰によって組織の解散を余儀なくされていたため、戦後しばらくはカトリック勢力が穏健な形でフランデレン運動を展開させていく。1946年、カトリック

人民党（カトリック党の後継。CVP）主導によりカトリック・フラームス高校生協会（KVHV）によって「青少年巡礼」が開催され、1948年にはエイザー巡礼も再開し、カトリックのエリートによる親ベルギー的な巡礼が行われた。これらの巡礼を呼びかけるポスターには爆破されたエイザー塔の残骸が描かれ、その再建を訴えるメッセージが記されていた（Cobbaert et. al 2021, pp.87-88）。その後、1950年選挙でCVPが単独過半数を獲得し、カトリックによる単独政権が樹立されると、政府はエイザー塔の再建費用として1500万フランを支出した。

一方、戦後のフラマン民族主義政党としては1979年に「フラームス集中」が元フェルディナソ、元VNVのメンバーが中心になって設立されたが、対独協力者への抑圧に関するテーマ以外の争点でCVPと差別化することができず、同年の選挙では議席を獲得できなかった。その後、1950年選挙では候補者擁立を見送り、内部抗争の末、1954年に事実上消滅した。

戦後フランデレン運動の最大の担い手となるのは1954年に結成された「民族同盟（VU）」であった。VUは大戦中のコラボレーションと関わりが薄かった人々が中心となって設立され、民主的な手段でフラマン民族主義を実現することを目標としていた。確かに党幹部やマニフェストは戦間期から大戦中の運動に見られたような全体主義的な側面は見られなかった。しかし、外部には「フラームス過激派騎士団（VMO）」というVUを支援する過激派組織があり、彼らはVUの宣伝活動を担っていただけではなく、1958年からはVUの正式な下部組織として活動を行っていた。

VUは1958年の下院選挙で1議席しか獲得できなかったが、1960年代の言語紛争による連邦化への欲求の高まりを受けて着実に勢力を拡大していった。ここから現代までのベルギーの連邦化をめぐる政治史は日本国内においても多数の文献がするため割愛し、エイザー塔と巡礼の展開の歴史に絞って議論する。

塔の再建と戦後のエイザー巡礼の展開

1948年、塔の跡地に「AVV-VVK」が書かれた白い十字架のモニュメントが

【写真2】 初代エイザー塔の跡地に
建てられた十字架（手前）



【写真3】 初代エイザー塔の残骸で
造られた平和門



出典：ともに筆者撮影

作られ、その下部に「ここに砂の中の種のように遺体が埋まっている。フランデレンよ、収穫を望む」という作家のシリエル・フェルシュハーフの詩が書かれた（写真2）。また、1949年には爆破された塔の残骸で「平和門」という新たな建造物が作られた（写真3）。門の側面には塔の四方を囲うように建てられていた「エイザーの英雄」の像が付けられ、門に取り付けられた碑文には「憎しみがエイザー塔を破壊した 愛は瓦礫からこの門を建てた」と記されていた。つまり、塔の破壊でフランデレンの民族主義的な感情がなくなることはなく、むしろ、ベルギー政府やフランス語圏の人々による不正義の被害者としてのイメージやキリスト教信仰における「復活」のイメージを提供し、結束を強化する方向に作用したのである。

このような被害者としてのイメージによって、フラマン民族主義者によるコラボレーションという問題が矮小化された。戦後のフランデレン運動の中でも

コラボレーションに従事された人々は無実の愛国者であるとして擁護され続けた。むしろ、対独協力者に厳しい声を上げ続けるフランス語圏や元レジスタンスの人々に対し、敵意を抱いていた。

塔の再建はCVP政権による支援の下、1952年に開始された。新しい塔は最初の塔とほぼ同じデザインであるが、高さは元の塔の約1.7倍の84メートルになり、元々塔のあった場所から150メートルほど離れた場所に建設された。しかし、建設費は政府が支出した分だけでは足りず、巡礼の参加者から少しずつ寄付を募って費用を捻出したため塔の完成は1965年まで待つことになる。

一方、1950年から51年にかけてコラボレーションの罪で収監されていた民族主義活動家たちが釈放されると、巡礼委員会は穏健派のカトリック勢力と急進派の民族主義勢力との間に対立が見られるようになった。前者は巡礼でベルギーという国家の存在を認めるべきだと考えていたのに対し、後者は従来の反ベルギー的な性格を持たせるべきだと考えていた。民主的な連邦化を目標とするVUの設立により、反ベルギー的な主張は弱まったものの、今度是对独協力者の恩赦の実施を主張するようになった。

なぜ、フラマン民族主義運動が恩赦を求めたのだろうか。それは、コラボレーションで有罪になった者が刑を受けただけではなく、社会的権利や政治的権利を剥奪されていたためである。確かにベルギーでも対独協力者への減刑は行われてきたものの、釈放後は公務員や教員、弁護士になることはできず、政府の福祉サービスも受けられず、出版や選挙への立候補を通じて政治的な意見を表明することも禁じられていたのである。こうした権利が剥奪された状態を回復できる手段が恩赦だったのである。隣国のオランダやフランスでは終戦から1950年代にかけて対独協力者への恩赦が実施されたものの、ベルギーではドイツとオランダ語圏の民族主義運動との関わりが特に強かったことから、フランス語圏で強い反発に遭って2024年11月現在に至るまで恩赦は実施されていない。

こうした背景から、巡礼では第1次世界大戦のフラマン人兵士だけでなく、第2次世界大戦前後でベルギー政府の不正義により犠牲になった人々も追悼する対象に加えられた。

1950年代から70年代はベルギーで最も言語紛争が激化した時代のひとつでもあり、エイザー巡礼の場でも連邦化が訴えられた。1954年、国王令によりフランデレン地域の3つの自治体が2言語併用地域であるブリュッセル首都圏に加わるという決定がなされ、フランデレン側の大きな反発を招いた。その数週間後に行われた第27回エイザー巡礼は「言語境界線にある絶滅の危機に瀕したコミュニティ」というテーマで行われ、暴動が発生した。また、1962年の第35回エイザー巡礼ではベルギーの連邦化が訴えられ、2ヶ月後に行われるブリュッセルでの抗議デモへの参加が呼びかけられた。

エイザー巡礼はフランデレンの民族主義を訴えるだけでなく、バスクや北アイルランドなどの国家を持たないエスニック集団との連帯を示したほか、女性や若者をテーマにする巡礼も行い、その意義を多様化させた。巡礼の参加者数も増加し、1971年には5万人、1977年には6万人（いずれも警察発表）が参加し、連邦化への期待も相まって運動はピークに達した。

4. 穏健化と巡礼をめぐる分断

エイザー塔の公式シンボル化と運動の分裂

1970年代に最盛期を迎えたエイザー巡礼だが、これ以降運動は衰退の一途をたどる。1980年代からネオナチ組織が公然とパレードを行ったり、前夜祭で暴動が起きたりして悪いイメージが付くようになったのも一因だが、最も大きなきっかけは皮肉にもフラマン民族主義に近いCVPの政策がきっかけであった。1980年、フランデレン評議会（現在のフランデレン議会の前身）のCVP所属のゼファ・ライマーカー議員はフランデレン共同体政府がエイザー塔を「フランデレン思想の記念碑」と認めるという趣旨の法案を提出した。これはすぐには承認されなかったが、同様の法案が1986年に通り、エイザー塔はフランデレン政府から公的な支援を得ることが可能になった。1992年には塔とその周辺の施設が記念碑としてフランデレン政府の保護を受けた。

しかし、塔が政府の支援を受けるのと引き換えに、コラボレーションの反省や反ベルギー的なイデオロギーの穏健化を余儀なくされた。1989年から新たに

巡礼委員長に就任したライオネル・ファンデルヴェルヘや VU 左派による推進もあり、従来の巡礼の原則（「エイザーの契り」と呼ぶ）であった「自治・反戦・神の平和」も「平和・自由・寛容」に置きかわっていった。こうしたメッセージの現代化に対して、1980年代から存在感を増してきた極右グループは不満を持つようになった。

1980年代末から90年代にかけては極右政党「フラムス・ブロック（VB）」が台頭する時代であったが、こうしたエイザー巡礼の穏健化は極右と距離を置き、牽制するものとして急進派グループの反発を招いた。1995年、エイザー巡礼委員会の急進派が事実上解任されたことに反発し、「エイザー巡礼フォーラム」を組織した。その後、急進派はフラムス国家青少年運動（VNJ）を中心に同年の第68回エイザー巡礼が行われている横で代替集会を行った。その後、巡礼委員会との交渉で譲歩を引き出すことに成功したものの、1996年の巡礼中にはVBの支持者が乱入して一時騒然とするなど緊張関係が続いた。

1997年、ユネスコが世界遺産「第1次世界大戦（西部戦線）の追悼と記憶の場」を構成する遺産のひとつにエイザー塔が選出されたのを機に、歴史家のフランス＝ヨス・フェルドートらからなる革新的なグループは戦争の記憶について議論を進め、1999年にフランデレンのコラボレーションは容認できないという考えを表明した。そして、2000年の第73回エイザー巡礼にてフェルドートはコラボレーションという「過去の誤り」について「歴史的な謝罪」を行った。この謝罪はそれまで歪められてきたフラマン民族主義者によるコラボレーションのイメージを打破したと評価される一方、極右グループの反発ももたらした。

最終的に極右グループは2002年に巡礼委員会から離脱し、2003年から別のイベントとして「エイザーの目覚め」を行うようになった。一方のエイザー巡礼側は次第に政治色を弱めていき、2010年からは完全に政治集会としての性格を取り払い、今後は死者の追悼のみを目的とすることになった。巡礼は年々縮小傾向であり、現在は数百人規模の小さな集会になっている。

また、エイザー塔の中にある博物館も1990年代以降、フランデレン政府から公的なモニュメントとして認定され、公的支援を受ける中で、展示がフラン

デレン運動やコラボレーションに対して無批判で一方的だという批判を受けた。そのため、館内のフラマン民族主義や巡礼についての解説は表面的なものに変更された。平和教育を専門とするマーテン・ファン・アルスタインはこうした博物館の方針について、複雑で論争的な歴史に終止符を打ち、新たなスタートを切りたいという願望の現れだと評している (Van Alstein, 2016)。したがって、現代のフランデレン運動におけるエイザー塔の役割は完全に影を潜め、その過去すらも積極的に語ろうとしていないのである。

「前夜祭」騒動

「エイザーの目覚め」は形式上、VNJ が主催した 1995 年の代替集会を第 1 回とし、第 2 回となる 2003 年から 2024 年まではほぼ毎年開催されてきた (2020 年はコロナウイルスにより中止)。

同イベントは従来の「エイザーの契り」である「自治・反戦・神の平和」を基本原則にしているとアピールしているが、その解釈はフランデレン運動の中でも極めて急進的なものである。特に「自治」についてイベント公式サイト (IJzerwake, 2020) では「フランデレン独立国家の設立に向けて取り組むことと理解される。ブリュッセルおよび 1830 年以降にフランス語圏または 2 言語併用地域になった地域は永久にフランデレン地域に属する」と説明しているが、同様のビジョンを主張する政党は極右の VB しかない。同じフラマン民族主義政党の「新フランデレン同盟 (N-VA)」ですら、フランデレン独立後のブリュッセルの扱いには曖昧な態度を示しており (柴田、2023)、「エイザーの契り」における「自治」が極めて狭く解釈されていることがわかる。

また、「エイザーの目覚め」はいかなる政党と提携していないと主張しているが、委員会のメンバーには VB 所属議員や VB と関わりが深い人物が名を連ねており、事実上 VB と提携していると言って差し支えないものであった。

こうした「エイザーの目覚め」の極右的な性格は、ベルギーだけでなく、オランダの極右政党やネオナチ組織を引き付けている。2014 年にはオランダの極右政党「民主主義フォーラム」のティエリー・ボーデが参加し、演説を行った。

また、2021年には「民族の抵抗」を名乗るオランダの極右組織が参加し、極右に批判的な人々の間で物議を醸した。そして、2022年に「エイザーの目覚め」の「前夜祭」の開催が発表されると、同イベントが開催されるイーペル市を巻き込んだ騒動に発展する。

2022年5月、「エイザーの目覚め」の主催者はイベントの前夜祭としてイーペル市で音楽フェスを開催することを発表した。このフェスに招待されたミュージシャンが極右組織と強い関係があると指摘された。報道によれば、招待された6人のうち、2人がアメリカのヘイトクライム組織「ハンマースキンズ」と関係があったと言われており、イタリアのバンド「ブロンソン」もネオファシスト組織の一員であった (De Standaard, 2022/5/25)。

当初、イーペル市議会はフェスを禁止する法的根拠が乏しかったため、主催者が差別を煽動しない等の義務を守ることを条件に開催を許可した。しかし、オランダ語系緑の党である「フルン (Groen)」のイーペル支部がこの決定に反対する署名活動を開始した。この中でフルン側は民族主義者が故郷を守った兵士に敬意を払うという追悼自体には理解を示しつつも、このフェスはそれとは程遠いと説明をしている (Het Laaste Nieuws, 2022/7/17)。これが発端となり、「前夜祭」開催中止を求める運動は既成政党や労働組合、左派ポピュリスト、平和団体も加わる大規模なものとなった。その後、市議会与党の一つでオランダ語系社会党の「前進 (Vooruit)」が開催許可を撤回しなければ与党を離脱すると表明したこともあり、市議会はフェス開催によるリスクを改めて評価した後、開催許可は取り消された。

「エイザーの目覚め」は穏健化したエイザー巡礼を本来の姿に取り戻すことを目的として始まったはずであるが、「前夜祭」の騒動でもわかる通り、エイザー巡礼の戦没者追悼という最大の目的を大きく逸脱し、単なる極右の集会として社会の大多数から批判の目を向けられるものになってしまった。一時は5,000人ほどの参加者を集めた同イベントだが、近年は参加者数が低迷し、採算を理由に2024年の開催を最後とすることが発表された。今後は別形態のイベントを検討するという (Focus en WTV, 2024/9/19)。

5. おわりに

フランデレン運動にとって、第1次世界大戦は大きな転機であった。それまでの運動はオランダ語の普及やフランス語話者エリート支配の脱却を目的としたものであった。しかし、戦時中に起きたカトリックと都市や農村のイメージの統合のもとで「ベルギー人」ではなく、「フラマン人」としての戦争の記憶が形成されたことで、フラマン人のアイデンティティが強化され、その後のフランデレン運動の推進力となった。特にエイザー塔とエイザー巡礼がそこに果たした役割は大きく、塔のあるディクスムイデはフラマン人の戦争の記憶を100年にもわたって語り継ぐ場として機能した。

その一方で、フランデレン運動が語り継ぐ戦争の記憶は、フラマン民族主義者の一部がドイツの占領政策に協力的だったという事実を軽視したり、矮小化したりする側面も存在した。そのため、追悼行事や施設はしばしばフランス語圏の人々から批判され、活動が妨害されることもあった。しかしながら、すでに「フラマン人」としてのアイデンティティと記憶が強力に存在する中での批判や妨害は「フラマン人」に対する攻撃と受け止められ、かえって民族的意識を強める結果となった。

しかしながら、現代におけるエイザー塔や巡礼が果たす役割はかなり縮小している。それはエイザー塔が公的なモニュメントになってコラボレーションの記憶など複雑で論争的な過去について表に出しにくくなったことも一因であるが、連邦化の達成でフラマン民族主義自体の政治的な意義が失われた点もあるだろう。確かに現代でもVBやN-VAというフラマン民族主義を掲げる政党はフランデレンで大きな支持を集めているが、どちらにとってもフランデレンの独立ないし自治拡大は最大の争点ではなく、フラマン民族主義のレトリックを用いて移民排斥や社会保障の削減を正当化することが両党の重点になっている。連邦化が進んでいくにつれVUが衰退したように、現代ベルギー政治においてフラマン民族主義はそれ自体で支持を動員できるテーマではなくなっている。

とはいえ、フランデレンにおける戦没者追悼の歴史が現在のフラマン民族主

義政党のあり方を決定づけた点は無視できない。それまで穏健派も急進派も一体となって行ってきたエイザー巡礼が1980年代以降、両派の対立が激化して最終的に分裂に至ったことは、フラマン民族主義に2つの潮流をもたらした。ひとつはフラマン民族主義を掲げつつも、第2次大戦のコラボレーションを過去の誤りと否定し、既成政党との妥協を通じて穏健な政治を目指すもの、もうひとつがコラボレーションを否定せず、フラマン民族主義に外国人や性的マイノリティの排斥という極右的な価値観を付け加えるものである。前者がN-VAのイデオロギー、後者がVBのイデオロギーと考えれば、エイザー巡礼と現代ベルギー政治のつながりが見えてくる。

また、言語境界の両側で異なる戦争の記憶が存在する状態は続いており、それがベルギーの人々の結束に影を落としていることも事実である。ベルギー人の植民地主義とコラボレーションに関する歴史的記憶を調査したヴァレリー・ロズーによれば、オランダ語圏にとって植民地主義はフランス語圏の責任、フランス語圏にとってコラボレーションはオランダ語圏の責任だと考えられており、こうした記憶の単純化と断片化により国民の反省的な取り組みができなくなっていると指摘している (Rosoux, 2022)。こうした状況下で過去に行われた道徳的過ちを反省し、それを将来の社会に活かすには、お互いのコミュニティに存在する歴史に埋没した「影」を直視し、歴史的記憶の相互理解を促す必要がある。

本稿はベルギーのオランダ語文献に大きく依拠しているため、議論がフランデレン運動に近い立場で行われている可能性がある。例えば、両大戦中の占領政策への協力について具体的に何を行ったのかについて説明がされている文献を参照できなかったことから、十分な説明ができないまま議論したことによりフランデレン運動の反対者の感情がわかりにくい部分がある。こうした問題点を克服するためにもさらなる史料の収集、文献の調査を継続する必要がある。

*本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2109 の支援を受けたものである。

(参考文献)

- Beyen, M. (2012). 'A parricidal memory: Flanders' memorial universe as product and producer of Belgian history. *Memory Studies*, 5 (1), 32-44.
- IJzerwake (2020). 'Het IJzerwakemanifest: de traditie wordt voortgezet' (<https://web.archive.org/web/20240620060717/https://ijzerwake.org/geschiedenis/>, November 15, 2024)
- Reyntjens, A. (2014). *De IJzertoren: en de nieuwe Vlaamse benadering van de oorlog*: Standaard Uitgeverij.
- Rosoux, V. (2022). Federalization of the Belgian national past: Do collaboration and colonization still matter? In D. Caluwaerts and M. Reuchamps (eds.) *Belgian Exceptionalism*, 171-184.
- Van Alstein, M. (2016). Facing a Difficult Past? The Yser Tower in Dixmude, Belgium. In *Cultures of History Forum*.
- Vandeweyer, L., Scheerlinck, K., & Bertels, J. (2021). 100 jaar IJzerbedevaarten in affiches 1920-2020: Peristyle.
- Witte, E., Meynen, A., & Luyten, D. (2016). Politieke geschiedenis van België, Standaard Uitgeverij.
- 石部尚登 (2011) 『ベルギーの言語政策 方言と公用語』大阪大学出版会
- 佐藤竺 (2016) 『ベルギーの連邦化と地域主義——連邦・共同体・地域圏の並存と地方自治の変貌』敬文堂
- 柴田拓海 (2023) 「現代フランデレン地域主義のダイナミクス：並立する2つの右派ポピュリスト政党」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』第374集、pp.61-79.

(データベース)

- CegeSoma (2017) *Belgium WWII*, (<https://www.belgiumwwii.be/nl>, November 14, 2024)
- DEVB (2023) *Encyclopedie van de Vlaamse beweging*, (<https://encyclopedie.vlaamsebeweging.be/nl>, November 9, 2024)

(ニュースサイト)

- De Standaard, (<https://www.standaard.be/>, November 14, 2024)

Focus en WTV, (<https://focus-wtv.be/>, November 14, 2024)

Het Laaste Nieuws, (<https://www.hln.be/>, November 14, 2024)

VRT nws, (<https://www.vrt.be/vrtnws/nl/>, November 14, 2024)

(しばた たくみ)

(2025年1月15日受理)